

ボリショイ劇場芸術展

～ロシアの色彩・舞台芸術の世界～

開催期間：～6ヶ月

開催場所(予定)：全国1～3箇所 東京、大阪等

プランナー/コーディネーター：山本萌生 Mavita Japan 株式会社

革命、冷戦そしてソ連崩壊など、ロシアは波乱に満ちた歴史を歩んできていたにも拘らず、舞台芸術はいつも市民の心の拠り所でした。国家が混乱していたとしても、いつもそこにある「軸」のような存在、それが劇場という場所です。そして時に政府の圧力を受けながらも芸術家たちは表現を続け、舞台芸術は観衆によって育てられてきました。

ボリショイ劇場は1776年からの250年続く歴史があり、そしてボリショイ劇場“美術館”は昨年2018年に100周年を迎えました。劇場美術館のミッションは、国の変遷、移ろいゆく時代の思想やモードの反映が顕著な舞台芸術の細部を保管し、次世代の人々へ紹介し続けることです。衣装や舞台デッサンは歴史を読み解くヒントに溢れ、また想像力が掻き立てられます。

劇場の多面的な面白さと歴史や文化を知ってもらう機会を、伝統の玉手箱・ボリショイ劇場美術館から日本の皆様へお送り致します。

企画概要

【展示開催にあたり日本における背景】

舞台芸術の世界は「知ることの楽しさ」を知るヒントが沢山用意されている。

日本には4700以上のバレエスクールがあり、推計約36万人（「日本のバレエ教育環境の実態分析」より）がバレエを習っている子供や大人がいる。そして年間3000以上の演劇・ミュージカル・バレエ・オペラなどの舞台の上演があり、ボリショイ劇場の来日公演では1枚2万円以上と高価なチケットにも拘らずほぼ完売。パリ・オペラ座バレエ団、ミラノ・スカラ座、ロイヤル・バレエ団など世界の名だたるバレエ団も2、3年に1度は必ず来日公演がある。それだけ日本ではバレエやオペラを観る楽しみを持っているファンが多いと言える。

【展示コンセプト】

しかし、バレエファンだけでなく一般の人々も、舞台の歴史や衣装の仕組み、総合芸術としての側面などを習う・知る機会は非常に少ない。クラシック・バレエの技術だけでない世界観を敢えてバレエ従事者にも知ってもらい、そしてロシアという国や、文学、演劇、音楽、デザインなどにも興味を持つ広く一般の人々も巻き込み、ボリショイ劇場を形成する多面性を紹介することで、文化を、知ることの豊かさを体感してもらう展示。それが本展の狙いである。

【対象者】

バレエを習っている子供からその親御さん、観劇が好きな方、また舞台芸術に触れたことのない方にも、舞台芸術の多面的な要素を理解する機会としたい。

【展示内容】

1780年の創設以来今日に至るまでポリショイ劇場では様々なダンサーを輩出してきた。有名なダンサーや歌手たちは劇場を代表する顔ではあるが、華やかな舞台を作り裏で支える裏方たちの職人技なしでは彼らの栄光は語れない。

音楽家・振付家・演出家・デザイナーや指揮者等各分野で、現代のポリショイ劇場栄光の基礎を築いてきた芸術家は数多く、その中でも特筆すべき分野、音楽・美術・ダンサーに焦点を当て、彼らの世界観とポリショイの伝統への絡みを掘り下げる。

舞台を造る匠の技にフォーカスし、250年以上の歴史を誇るポリショイ劇場の伝統に触れながら、特殊メイクの世界や、オペラやバレエ衣装の装飾技術を間近で見学可能にし、トウシューズや衣装に触ることが出来る**体験型の新しい舞台芸術の展示**を行う。舞台衣装がいかに軽量か、煌びやかな装飾の意味、照明は衣装を“本物らしく見せる”技術を要しているなど、そういった舞台芸術の仕組みを体感できる展示会を目指す。

【ポリショイ劇場委任状内容】

日本での劇場展開催におけるプランニング、展示会開催権利

【プランニング・コーディネーター内容】

- ・展示会内容のアドバイス
- ・展示会内容のプレート作成
- ・協賛企業募集サポート・プレゼンのアドバイス
- ・関連グッズの提案、ポリショイとの交渉・アドバイス
- ・展示会カタログの作成、翻訳など
- *各作業に関してポリショイ劇場の意向を確認・協議を行う
- *ロシアでのアテンド（要相談）

*各契約、ライセンスなどに関してはコンサル内容には含まない

貸し出しや損害賠償等、権利関連・法律問題に関してはしかるべき専門家に依頼

【まとめ】

女の子のお稽古事として認識されているバレエは3歳から80代という幅広い年齢層の習い事と

して不動の地位を得ている。また美容としてのバレエも盛んで、スタジオの数は前述した通りだが各スポーツジムにもバレエクラスが組み込まれており、需要が高いことが分かる。

つまり芸術鑑賞という観点からではなく、**一種のお稽古事として日本に馴染んでいる**というのが現在の日本の現状である。一方で国内外のコンクール受賞者や海外で活躍する日本人ダンサーも増加している。

世界中のバレエ団の日本公演も多く観劇を楽しみにしている方も非常に多いことを考慮するとボリショイ劇場の舞台芸術を多面的に紹介することは、演者と観客側に対して知識を得られる豊かな場となり、またロシア文化そのものを知ることが出来る機会となる。

目玉になる衣装、展示例

* 「プリセツカヤのカルメン」衣装・写真・映像

* 「ボリス・ゴドノフ」の衣装・写真・映像

* チャイコフスキー作品 /バレエ「くるみ割り人形」ニーナ・アナニアシビリ、「眠れる森の美女」スベトラーナ・ザハロワの衣装、オペラ「スペードの女王」エレナ・オブラーツォワの衣装をメインに使い、ロシアの作曲家と舞台とを繋げる。

来日公演で衝撃を与えた伝説のバレリーナ、マヤ・プリセツカヤと、なかなか日本で上演される機会が少ないオペラ「スペードの女王」や「ボリス・ゴドノフ」など。この10キロ以上になる衣装の装飾と歌のシーン、舞台芸術はロシア美術の色使いの宝庫であるという色彩の観点からも引き込む。